

所 陵

No. 67

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



スカラベ Scarab (古代エジプト)

● 目 次 ●

近江八幡とかかわらミュージアム	市川 訓敏	2
アメリカ絵本史におけるリトル・ゴールデン・ブックス出版の意味	石原 敏子	4
関西大学博物館所蔵上中条出土人物埴輪(MY-K2006 巫女)について	犬竹 和	8
涌出宮の神楽座	三原 奈美	10
巡航船から見た明治後期の大坂	相良真理子	12
博物館なんでも相談会	石立弥生子	14

関西大学博物館

〒 564-8680 大阪府吹田市山手町 3 丁目 3 番 35 号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/index.html>

近江八幡とかわらミュージアム

市川訓敏

はじめに

近江商人のふるさととして知られ、豊かな自然に囲まれた滋賀県近江八幡市。その名前の由来ともなった日牟禮八幡宮周辺は、国の「重要伝統的建造物群保存地区」の選定を受けており、その一角に近江八幡市立かわらミュージアムが、周囲に溶け込むように建てられている。もともとこの地には、寺本仁兵衛氏の「瓦工房」があり、その跡地を近江八幡市が購入、後世に八幡瓦の魅力を伝え遺そうとして、その基本計画を全国に公募し、建築家の出江寛氏の構想が選ばれることになった。

かわらミュージアム

「かわらミュージアム」は、八幡堀と寺本家などの旧村に挟まれた敷地を利用、八幡堀の対岸には、瓦屋根と漆喰壁の蔵や町屋が連なって美しい佇まいを残しており、しかも、国の「重要伝統的建造物群保存地区」であるという制約を見事に克服し、周囲の景観と調和していて、気をつけないと、そこにミュージアムがあることも気づかないほどである（ミュージアムを示す標識も目立たぬように配置されている）。

ミュージアムは、全国にも珍しい瓦専門の展示館であるが、敷地に一步入った所から、ミュージアムは始まっており、表玄関へのアプローチの道は、古瓦などを綿密な計算のもとに敷き詰めた規律のある「楷書」の道であり、出江寛氏は、世阿弥の言うところの「閑華風の道」と名づけられた。そして、北へ抜ける自由奔放な「草書」の道と交わる中庭の「鯉の広場」を行書の心に見立てられた。歩くと足に心地よい。

そうした敷地内に、10棟からなる瓦づくりの建物が建てられ、漆喰でかためられた白壁と、24,000枚の昔ながらに黒く焼きあげられた屋根瓦（一枚一枚に色むらがつけられている）とのコントラストのなかで、広場のしだれ桜や百日紅、もみじなど四季折々の草木が彩りをそえるように設計されている。再び、出江寛氏の言葉



閑華風の道



中庭から見たエントランスホール



八幡堀から見たかわらミュージアム

を借りると、「瓦が歳月を重ねて深みを増し、漆喰に陰影のかかる頃、その白と黒の境界は溶けて、水墨画のトーンに落ち着いていくだろう」ことが期待されている。誰しも、そうした草木の咲き乱れる季節に再び来訪したい気にさせてくれる。

八幡瓦が、この地の地場産業になったのは、近江八幡市総合政策部文化観光課の佐竹章吾氏

(前館長)によると、近江八幡周辺には神社仏閣や近江商人の屋敷・土蔵などが多く、需要が高かったこと、また、重い瓦の運搬などに八幡堀や水郷などを利用できる水運の便があったこと、そしてなによりも、良質のかつ質の異なる粘土を豊富に採取できたことで、江戸中期に京都伏見からこの地に移り住んだ瓦職人たちがそのまま定着したということである。

今日では、機械化が進んだことで、かつての瓦工房は姿を消したが、館内に展示されている良質の屋根瓦、技術力の高さを示す彩色をほどこした瓦人形、芸術作品と言える鬼瓦など、往時の瓦製造を偲ぶに十分なものがある。

ミュージアムの一部は、かわら以外のさまざまな展示に利用され、来訪当時は、「自然といきものに魅せられて～美しい細密画・杉野由佳の世界～」を開催中であった。またコンサートやワークショップ、子どもたちのものづくり体験や地域学習、職員研修などにも活用される社会貢献に資する施設であることも、地域に溶け込んだ「かわらミュージアム」の別の一面として印象深かった。今回の来訪で、便宜をはかっていただき、かつさまざまなご教示をいただいた佐竹章吾氏、事務長の小森健行氏に、この場を借りてお礼申しあげたい。

ハイド記念館

先の出江寛氏も言及されているが、ここ近江八幡は、キリスト教徒であり建築家であったウィリアム・メレル・ヴォーリズが終生住みつけた場所であり、ヴォーリズ建築が町のあちこちに点在している。近江八幡に来たからには、ヴォーリズ建築の一端にでも触れたいと思い、ヴォーリズ建築の第一号である旧近江八幡YMCA会館(現、近江兄弟社アンドリュース記念館)、旧八幡郵便局舎などを回るとともに、近江兄弟社学園のハイド記念館を訪れることができ、館長の永芳和子氏から親しくお話を聞いたのは幸運だった。

ハイド記念館は、一柳満喜子(一柳末徳子爵の三女)が大正11年に開いた清友園から発展した幼稚園の建物であり、建築費を寄附したメンソレータム社の創業者ハイド家を称えてハイド記念館と呼ばれている。今日の近江兄弟社学園の原点であり、満喜子夫人の教育事業と、それ

をサポートしたメレル・ヴォーリズのかかわり方は、敬服の外はない。

建物は、ぬくもりのある木造の外観に加えて、内部は部屋を広くとり、高い天井と大きな窓が特徴で、子どもたちの目線で窓の外景色を楽しめる設計になっていて、簡素な中にも、さまざまな工夫が施されている。ヴォーリズや満喜子夫人、幼稚園関係者らが、あれやこれやといろいろなアイデアを出し合いながら建物をつくっていた様子が想像されて楽しい。いつまでも建物に居続けたいと思うのはヴォーリズ建築の特徴なのか、同志社のアーモスト館(新島襄の母校アーモスト大学との友好関係から建てられた学生寮)や関西学院の時計台など、神戸女学院の建物群、神田駿河台の「山の上ホテル」や京都四条大橋西詰にある東華菜館など、人びとに愛され、今日の日本建築に大きな影響を残した洋風建築としては、ヴォーリズ建築は特筆すべきものであることを、あらためて思った。

ハイド記念館では、生徒たちが吹奏楽の練習に余念がない様子だったが、永芳館長から校舎を案内していただき、またヴォーリズ、満喜子夫妻についてもお話が聞けた。

お話をうかがいながら、ドイツの社会学者マックス・ウェーバーが描いた、巨富を擁しながら自分のために一物をも持たず、ただよき「天職」の遂行というエートスに突き動かされて生きた初期の資本家たちの姿が思い起こされた。「資本主義の精神」とは、このようなものだったのかと思いながら、校舎を後にした。機会を与えていただいた、近江兄弟社学園及び永芳館長にあらためて感謝申し上げたい。



ハイド記念館

博物館運営委員 法学部教授

アメリカ絵本史における リトル・ゴールドデン・ブックス出版の意味 —「安曇野ちひろ美術館」の絵本歴史コーナーから発展して—

石 原 敏 子

1977年、東京都練馬区のいわさきちひろの自宅兼アトリエに開館された「いわさきちひろ絵本美術館（現「ちひろ美術館・東京」）は、絵本の芸術性を認め、絵本原画や絵本作家の作品・資料の収集・保護・展示・研究を目的とする絵本ミュージアムで、その誕生は、日本および世界において、絵本を「人類の大切な文化遺産」¹⁾とする絵本文化研究の幕開けであったとすることができる。この施設の開設は、ちひろさんのご子息である松本猛氏の構想によるもので、その後、収蔵対象をちひろ作品に限らず、国内・海外で現代活躍中の絵本作家へと拡大し、1997年「安曇野ちひろ美術館」の開館へと発展していった。

今日、絵本がこどものみならずおとなやお年寄りに必要なものとして認められ、絵本に対する関心が高まる中、各地にそれぞれに特徴を持つ絵本ミュージアムが点在し、また、既存の美術館やデパートでも絵本原画展が盛んに開催されている。筆者は、2008年度国内研究員として、延べ60か所の絵本ミュージアムやこども文化に関する施設や特別展を訪問・観覧した。その中でも、東京・安曇野のちひろ美術館には一番多く訪れた。

「安曇野ちひろ美術館」では、いわさきちひろの作品の展示とともに、美術館所蔵の現代世界絵本作家の作品がテーマをもって周期的に展示される。季節に合わせた、また、興味深いテーマ設定で、学芸員の熱意と努力が窺える。さらに、この美術館でもう一つ関心を引かれるのは、絵本の歴史をたどるコーナーである。松本猛氏の「絵本は、美術史の本流にある」(92)という信念に基づいて、紀元前16世紀の『死者の書』から、海外および日本の手書きの写本の時代、版本の時代を経て、今日の絵本を形作った19世紀後半から1945年以前を概観する作品や資料が展示されている。絵本の歴史を知ること

は、現代における絵本の意味—文字言語と視覚言語の融合により、年齢を超えて情操に訴えかけるメディアとして果たすべき役割とその可能性—を考える上で、とても重要である。

「安曇野ちひろ美術館」の展示が扱う最後の時代、1945年頃のアメリカ合衆国の絵本について、アメリカの絵本研究家バーバラ・ベイダー(Barbara Bader)、および、レナード・マーカス(Leonard S. Marcus)の研究を頼りに、手元にある絵本を用いながら、少し深く探ってみることにしよう。

アメリカ独自の絵本の黄金期は、ヨーロッパからアメリカに渡った移民や、そうした先祖を持つ絵本作家が台頭してきた20～30年代である。ピーターシャム夫妻(Maud & Miska Petersham)や、ドーレア夫妻(Ingri & Edger d'Aulaire)、ワンダ・ガアグ(Wanda Gág)などといった作家たちが、それぞれ、ハンガリー、ノルウェー、ボヘミアの文化を受け継ぎながら、新しい土地で自分たち独自の表現を作り上げていく過程で、面白い作品を作り、そのエネルギーがアメリカ絵本創造の原動力となった。

しかしながら、優れた絵本が生み出される一方で、30年代後期にいたるまで、アメリカの絵本は、一冊が1.5～2ドルの高価なギフトブックであり、丁寧に扱われるべきものであった²⁾。はたして、そうした絵本が本当にこどもの楽しみになりえたかと言えば、おそらくそうではなかったであろう。お風呂に持って入って叱られたこどものエピソードも残っている³⁾。そうした状況において、絵本本来の目的である、こどもが自由に読んで楽しめるものが必要という考えに基づいて、1942年、サイモン・アンド・シュスター社(Simon and Schuster)から、一冊25セントで、分厚いボール紙を表紙にした、色鮮やかな絵本が12タイトル出版されることになった。その後も、出版社や編集方針の変更など

を経ながら、今日までその人気を保つリトル・ゴールデン・ブックス (Little Golden Books) シリーズの誕生である。このシリーズは、アメリカの絵本およびこども文化の歴史を考える上で、忘れてはならないものである。その理由は、上述したように、一般家庭でも購入できる廉価本であったこと、それでいて、ストーリーや絵は一流の作者、およびイラストレーターにより作られ、その質が保障されていたこと、カラフルで生き生きした絵本作りを可能にする優れた印刷技術があったこと、そして、特に大きな要因であったのは、一般の書店のみでなく、デパートやスーパーマーケットで売られることで、母親たちがこども連れの買い物のついでに購入できたことなどである。こうして、それまでは一部の家庭のこどものものでしかなかった絵本が、一般に流布することになった。売り出されて5か月の内に12タイトルが三度増刷され、合計で1,500,000冊を記録したとの『パブリッシャーズ・ウィークリー』(Publisher's Weekly)の記事が残っているとのことである⁴⁾。

最初の12冊は、マザーグースや、民話、お祈りを題材としており、他には、アルファベットや数の数え方を教えるものもあった(図1)。親しみやすい絵と簡潔なテキストで、おとながこども(特に就学以前のこども)に読んでかせるのに適しており、出版後直ちに人気を博することとなった。第二次世界大戦のさなか、おもちゃ製造どころではない時代において、親子ともに夢のあふれる想像の世界へ入っていくことを可能にする、それも廉価で手に入れることのできるこれらの絵本が、一般家庭における娯楽となったことは指摘を待つまでもない。



図1



図2

12冊の中で、今日まで大人気の作品を挙げておこう。ジャネット・セブリング・ロウリー (Janette Sebring Lowrey) 作、グスタフ・テングレン (Gustaf Tenggren) 絵の *The Poky Little Puppy* である(図2)。いたずらの罰として兄弟はおやつをもらえなかったのに対し、好奇心旺盛で一人で冒険していた一番下の子犬は、帰りが遅くその場に居合わせなかったため、罰も無くおやつをもらう。このパターンが三回繰り返され、最後は立場が逆転し、子犬がおしおきを受けるというお話である。明快なストーリー展開、子犬の天真爛漫さ、こどもの普通の生活にもよくあるような経験の共有、そして、なんと言っても鮮やかな色使いで描かれた子犬の愛らしさに、このストーリーの人気の秘密がある。リトル・ゴールデン・ブックスの最初の12冊に含まれている *Bedtime Stories* もテングレンのイラストである。テングレンは、スイス生まれのイラストレーターで、初期はヨーロッパのおとぎばなしの伝統を継ぐスタイルの絵を得意としていたが、後にアメリカ合衆国に移住し、ディズニープロダクションにおいて『白雪姫』などの制作に関わり新しい作風を確立した。その後、ゴールデン・ブックスに参加することになり、ディズニーでの経験を生かして、こどもの心を捉える生命力あふれる絵を描くと同時に、『アラビアンナイト物語』(Tenggren's *Golden Tales from the Arabian Nights*, 1957)(図3)や、『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales of Geoffrey Chaucer*, 1961)などでは、シックでフォーマルでありながらも流れるような躍動感を持つ美しいイメージを駆使した絵本を制作した。



図 3

リトル・ゴールデン・ブックスの形態は、1942年の出版当時から変化することなく今日まで受け継がれている。17×20センチの大きさで、表紙は堅いボード紙、左端がテープ留めになっている⁵⁾。時代とともに、イラストが変わることもあるが、人気のタイトルは大半がオリジナルのままで出版され続けている。時に、特別版のような形で、大型版や、デラックス版（上記の『アラビアンナイト物語』など）、さらには、箱入りセットが売られることもあった。

図 4 は、ドロシー・クンハート (Dorothy

Kunhardt) 作、ガース・ウィリアムズ (Garth Williams) 絵による、それぞれ12冊の絵本のセット、*Tiny Animal Stories* (1948) と *Tiny Nonsense Stories* (1949) である。一冊の大きさは、5センチ強×8センチ弱、タイトルページを含めて18ページという小ぶりである。それぞれのセットにおいて、ミニ絵本12冊が、家をデザインしたボール紙の箱に収められており、その家の窓からは絵本に登場する動物たちが顔をのぞかせているところが描かれている。当時、全部で288ページのカラー版12冊セットが一箱で、なんと1ドルで売られていたということである⁶⁾。各絵本において、異なる一組の動物の親子に起こる出来事が描かれている。例えば、日向ぼっこで泥が固まってしまったサイの母子が父親に助けられるといったこと (*The Two Stuck-in-the-Mud Rhinoceroses*) や、エイプリル・フールに母子が父親にいたずらをしかける (*April Fool*) といった他愛のない事柄である。300語程度の短さながら、しっかりとした構成を持つお話になっている。また、本のデザインにも工夫が凝らされている (図 5)。*Tiny Animal Stories* では、おもて表紙は窓 (上記の箱に描かれた家の窓) から顔を出している動物を正面から、そして裏表紙はその後ろ姿を映し、*Tiny Nonsense Stories* では、おもて表紙のいたずらに夢中のこどもにはまるで無関心であるかのように、おめかしをしてでかける両



図 4



図 5

親の姿が裏表紙に描かれている。こうしたユーモアたっぷりの表紙を見るだけでも、読者は楽しい気分させられる。このセットを自分のものにした子どもたち（あるいは、おとな）の得意で満足げな表情を想像することができよう。

こうして1940年代に始まったリトル・ゴールデン・ブックスは、その後も様々な斬新な試みをしながら、こどもに優れたストーリーを提供し、彼らを芸術の世界へと導き、その好奇心を満たし、想像世界を豊かにし続けていく。20世紀後半および21世紀のアメリカの絵本読者を形成し、絵本市場を動かし、こども文化を作り上げてきた点において、このシリーズの重要性はいくら強調しても強調しすぎることはない。これからも、多くのこどもやおとなたちが、このシリーズを通して多くの優れた絵本に出会い、豊かな読書時間を持つことだろう。

【注】

- 1) ちひろ美術館ホームページ「理念」より。「ちひろ美術館」および、絵本美術館については、松本(88-89)、『絵本の事典』を参照。
- 2) Marcus, 32.
- 3) Marcus, 29.
- 4) Bader, 277.
- 5) Bader, 279. Marcus, 59-66. ダスト・ジャケットの廃止、紺色からゴールド・テープへの変更、42から24ページへの減少といった改変はあった。
- 6) Bader, 294.

【引用文献】

Bader, Barbara. *American Picturebooks from Noah's*

Ark to the Beast Within. New York: Macmillan Publishing Co., Inc., 1976.

Dixon, Rachel Taft, illustrated. *Prayers for Children*. New York: Simon and Schuster, 1942.

Gale, Leah, illustrated by Vivienne Blake. *The Alphabet from A to Z*. New York: Simon and Schuster, 1942.

Kunhard, Dorothy, illustrated by Garth Williams. *Tiny Animal Stories*, New York, Simon and Schuster, 1949.

_____, illustrated by Garth Williams. *Tiny Nonsense Stories*. New York, Simon and Schuster, 1949.

Lowrey, Janette Sebring, illustrated by Gustaf Tenggren. *The Poky Little Puppy*. New York: Simon and Schuster, 1942. New York: Golden Books, 2007.

Marcus, Leonard S. *Golden Legacy: How Golden Books Won Children's Hearts, Changed Publishing Forever, and Became an American Icon Along the Way*. New York: Golden Books, 2007.

Tenggren, Gustaf, illustrated. *Bedtime Stories*. Western Publishing Co. Inc., 1942. New York: Golden Books, 1992.

_____, illustrated. *The Canterbury Tales of Geoffrey Chaucer*, selected and adapted by A. Kent Hieatt and Constance Hieatt. New York: Golden Press, 1961.

_____, illustrated. *Tenggren's Golden Tales from the Arabian Nights*, retold by Margaret Soifer and Irwin Shapiro. New York: Simon and Schuster, 1957. New York: Golden Books, 2003.

『絵本の事典』中川素子他監修 朝倉書店 2011年。
ちひろ美術館ホームページ <http://www.chihiro.jp/rinen/omoi/> (2013年1月10日閲覧)。

松本猛『はくが安曇野ちひろ美術館をつくったわけ』講談社 2002年。

関西大学博物館所蔵上中条出土人物埴輪 (MY-K2006巫女) について

犬 竹 和

1. はじめに

関西大学博物館所蔵登録有形文化財埼玉県熊谷市上中条出土人物埴輪 (MY-K2004武人、MY-K2006巫女 (図1)) の修復を行った (独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所 (以下東文研) の平成24年度受託調査研究)。過去の修復で使用された修復材料に経年劣化がみられ、再修復を行ったものである。今回のような再修復は古い周知の資料を改めて調査するとともに、資料に関する軌跡をたどり日本の考古学史の一端を改めて知る機会でもある。



2. 掘りおこされた埴輪

時は明治、近代化の波が農村部まで押寄せ、武蔵国埼玉郡上中条村でも地租改正が施行されていた。そんな折、利根川の南側の自然堤防上に広がる田畑に鍬をいれた村の耕作人が目にしたのが埴輪土偶であった。持ち帰って、庭先に置いた。その後その埴輪土偶が人々の話題となり、取沙汰され、当時埴輪について正しい理解がなかったため、ついには役人に打ち壊されることになってしまった。それを聞きつけた当時元老院議員や文部少輔などを歴任していた神田孝平らによって回収あるいは避難できた埴輪が今日に残されている。それらが現在上中条出土といわれている埴輪である。なかでも東京国立博物館所蔵の重要文化財埴輪武装男子像 (図4) や埴輪馬が有名である。

3. 神田孝平と埴輪

今回修復をした人物埴輪もこの中の埴輪で、今日ではともに胴部、両手、台部を大きく欠失し頭部のみの残存である。神田孝平 (1830-1898) がこの頭部2点とその破片を手に入れた時 (明治10年頃か) の事を「縣吏來リテ打碎キタリト云予其事ヲ傳聞シ直ニ人ヲ遣ハシ其殘缺ヲ索メシメタルニ殘缺ノ首二個ト其余ノ破片數枚トヲ得タリ…」 (註1) と書いている。神田の死後、

この埴輪を含む神田のコレクションは一時竹田玩古堂へわたり、その後本山彦一 (1853-1932) が購入し (昭和5年頃)、昭和28年からは関西大学に移管となった。

4. 人物埴輪 (MY-K2006巫女) は男子

人物埴輪 (MY-K2006巫女) が壊される前の唯一の記録として清野謙次が紹介している筆者不明「発掘埴輪図」があげられる (註2)。明治9年12月2日武蔵国埼玉郡上中条村字沼窪…とかかれた埴輪の図である。この図では人物埴輪 (MY-K2006巫女) にはない両腕 (右腕を上げ左腕を下げています。手は無い。) と胴と台上部が画かれている。襷をかけ、腰に紐を巻いている男子の埴輪である。頭頂部には管状の飾り

図2

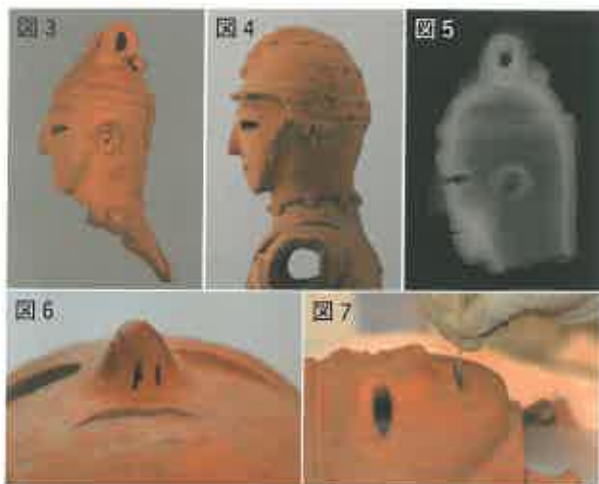


武蔵国沼窪出土の埴輪土偶 (『発掘埴輪圖』)

をつけ、鉢巻をし、首飾りをつけている。こういった描写は今回修復した人物埴輪 (MY-K2006巫女) と一致しこれを写生したものと推察する。また実際、当資料の肩部の破片は右肩がわずかに上がり、左肩が下がっている点からも信憑性が高いと思われる。

5. 作りが似ている埴輪

近年の埴輪研究では使用した工具痕などから同工人や製作組織について研究がすすめられている。当資料は古くから人物埴輪の優れた遺物として知られているとともに、埴輪の製作者という視点から論じられた埴輪としても旧知の埴輪である (野間清六 (註3)、小林行雄 (註4))。例えば当資料は東京国立博物館所蔵の埴輪武装男子像 (図4) と比べると造作が酷似しているのがよくわかる。顔の輪郭と目鼻口の形やその配置、眉の出っ張り、鼻筋、そして目口の孔の縁にあるわずかな隆起が特徴である。目や口、耳の穿ちかたや、鼻孔にも製作者の特徴がある (図6)。今回撮影したX線写真 (図5) では目や口などの孔は外側から削り貫いたことがよくわかる。また粘土の積み方、頭頂部の閉塞の仕方、顎や鼻の粘土の貼り付けが観察できる。



6. 出土した古墳は？

当資料が出土した上中条は中条古墳群の上中条支群と呼ばれる古墳が点在している場所である。現在、周辺地域は耕地整理で新しい区画や道が整然と並び、開墾地上部は削平され、古墳の所在を確認するのは難しい状態である。発見場所に関連する数少ない記録を表にまとめた。記録が手記や雑記ということもあり、情報が錯綜し、正確性にかけている感が否めないが、明治8、9年頃、字日向島（沼窪という字は存在しない）の江森（守）氏の畑もしくは付近で発見されたようである。いずれも古墳名の記載はない。日付や字がまちまちなのは、幾度かにわたって同じ場所とは限らず埴輪が発見されたこと、自然堤防上に並ぶように点在していた古墳（註6）が隣接する三つの字の境界付近にあり境界線がはっきりわからずに字があやふやなまま記録されたことによるのかと推測する。

表

出典	発見に関連する部分の抄出
常光院親田僧正の手記（小久保ていがまとめたもの）（註7）	・明治8年9月10日 上中条1867番地（田の中の丘淵） 1体（女人像） ・明治9年2月2日～3日 江守定之丞の土地 字日向嶋（1867番地） 畑の端地（東側） 12体（軍士4体、馬、その他）
萩原巖雄『観古図録』第四冊（註2）	・明治9年2月2日 江森善兵衛の土地 字沼窪 13個（土偶7個、馬1個、その他）
筆者不明「発掘埴輪図」（註2）	・明治9年12月2日 江森善兵衛私有地 字沼窪
神田孝平（淡漣）（註1）	・明治8、9年頃 中條村
小林兵右衛門「北陸御巡幸書類」土壘馬（註5）	・明治10年 江守定之丞所有地 字雷電 中村孫兵衛所持
東京国立博物館の埴輪馬（註8）	・明治9年12月2日 字日向島 埴輪武人8伴出

7. おわりに

東京国立博物館の埴輪武装男子像や埴輪馬は上中条支群の鹿那祇東古墳から出土したと報告されている（註6）。鹿那祇という名前は村の鎮守として江戸時代の上中条村に存在していた鹿那祇神社（『新編武蔵風土記稿』巻之二百十八埼玉郡之二十忍領上中條村）と関連していると思われる。鹿那祇神社は現存しないが『旧高旧領取調帳』にも鹿那祇神社領として石高の記録が残っている。明治初期の迅速測図（註9）には三箇所に鳥居記号が書かれている。一つは吉野神社、一つは雷電神社（現在の三幸神社がある場所）、一つは無記名である。この迅速測図を昭和22年11月3日に米軍が撮影した空中写真（写真番号105）に重ねると無記名の鳥居記号のすぐ北側に円形のものが確認できる。またその北側にも古墳と思われる円形のものが認識できる。無記名の鳥居記号が鹿那祇神社であるならば、これらが鹿那祇東または西古墳であるかもしれないと指摘しておこう。

謝辞

本資料について大正大学の塚田良道教授から多くのご教示をいただきました。記して感謝を申し上げます。

図版解説

- 図1 人物埴輪 MY-K2006巫女
（修復後、撮影：東文研 塩野誠治）
- 図2 筆者不明「発掘埴輪図」の図
清野謙次『日本考古学・人類学史』下巻より
- 図3 人物埴輪 MY-K2006巫女
（修復後、撮影：東文研 塩野誠治）
- 図4 埴輪武装男子像
画像提供：東京国立博物館（<http://www.tnm.jp>）
- 図5 人物埴輪 MY-K2006巫女X線写真
（撮影：東文研 犬塚将英）
- 図6 人物埴輪 MY-K2006巫女の鼻孔
- 図7 人物埴輪 MY-K2006巫女修復中 口孔の土の除去

註

- (1) 淡崖 1887「埴輪ノ事」『東京人類学会』第2巻第11号 東京人類学会
- (2) 清野謙次 1955『日本考古学・人類学史』下巻 岩波書店
- (3) 野間清六 1942「埴輪美」聚楽社
- (4) 小林行雄 1974『陶磁体系埴輪』第3巻 平凡社
- (5) 塩野博 2004『埼玉の古墳〔大里〕』（櫛さきたま出版会）
- (6) 柿沼保夫 1988「中条古墳群について」『熊谷市郷土文化会誌（中条特集号）』第42号 熊谷市郷土文化会
- (7) 小久保てい 1973「常光院三十八世親田僧正手記（九）」『埼玉史談』第20巻 第3号 埼玉県郷土文化会
- (8) 本村豪章 1990『古墳時代の基礎研究稿—資料篇（Ⅱ）—』「東京国立博物館紀要」第26号
- (9) 歴史的農業環境閲覧システム <http://habs.dc.affrc.go.jp>

文化財修復師 大正大学文学部歴史学科非常勤講師

涌出宮の神楽座

三 原 奈 美

祭りの見学にうかがうと、女性が供え物に触れることや、その準備をしている場所に近づくことを禁じている場合がある。一方で、神楽を舞う巫女や供え物を運ぶ女性など、祭りに欠かせない役割を担って女性が登場することもある。

京都府の木津川市山城町平尾の涌出宮^{わきでのみや}では女性たちが集まって、神楽座と呼ばれる行事を営んでいる。

涌出宮は正式名称を和伎座天乃夫岐売神社^{わきにますあめのふさめ}といい、平安時代の『延喜式』神名帳にも記載された古社である。

この神社の行事は、神楽座を含めて「涌出宮の宮座行事」として、昭和61年に国の重要無形民俗文化財の指定を受けている。とくに2月の居籠^{いごもりまつり}祭は、拝殿での饗応や御田植神事など、古式を伝える数々の儀礼が注目され、毎年多くの見学者が訪れる（写真1）。



写真1 居籠祭の御田植神事

秋祭^{ひっくみ}りには、9月にアエーの相撲、10月に百味^{おんじき}の御食が行なわれる。アエーの相撲では長老たちが神社に集まり、拝殿で神とともに食事をした後、子供たちが境内で相撲を奉納する。相撲の前に「アエー、アエー」と言いながら土俵で太刀を振る所作が、この名前の由来であるとも考えられている（写真2）。

百味の御食は栗や柿などの秋の収穫物を奉納する行事で、前日に供え物を盛り付けて拝殿に



写真2 アエーの相撲



写真3 百味の御食

置いておく（写真3）。行事の当日は長老たちが拝殿から本殿に並び、供え物を手渡しで供えていく。

涌出宮では特定の家々で構成された8つの祭祀組織があり、神社のそれぞれの祭りに関わっているが、このうち大座・殿屋座・岡之座・中村座の4つが秋祭りにたずさわってきた（中村座は現在活動を休止している）。

神楽座も秋祭りの組織に関わる行事で、かつては4座すべてで行なわれていたが（註）、現在は岡之座と大座のふたつがこの行事を伝えている。

岡之座では、春の彼岸の中日（春分の日）に神楽座が営まれる。午前中、岡之座の主婦たちが神社の拝殿に集まって席につき、宮司の祝詞奏上の後、ソノイチ（巫女）が神楽を奉納する



写真4 岡之座の神楽座

(写真4)。30分ほどの短い行事であり、近年までは中村座の主婦たちも一緒に参加していた。

神楽座の当番(トウヤ)は、毎年一軒ずつ決められた順につとめ、トウヤに当たった家では神前に供える供物を用意する。供物は、白米、煮物や卵焼きなどの鉢物、酒粕を煮て作った粕酒、ナゾラエモノ(擬えもの)である。ナゾラエモノというのは大根を男根形に削って先端に唐辛子を付けたもので(写真5)、奉書紙で包んで水引をかける。これはトウヤの主人がつくることになっているが、手先の器用な親戚や知人の男性に頼むこともあるという。子供を授けたい女性が祭典後にこれを貰って食べると、子宝に恵まれるといわれている。



写真5 男根をかたどったナゾラエモノ

かつては神社での神事に先だって、岡之座の主婦たちがトウヤに招かれ、もてなしを受けた。トウヤの家に着くとまず床の間に飾られたナゾラエモノを拝み、家の主人に挨拶をして席に着く。そして鉢物や赤飯、時には鶏肉のすき焼きや仕出し屋の料理をご馳走になった。振る舞われた粕酒は砂糖を加えて味を調節し、大根の漬物を食べながら飲んだそうである。トウヤの主

人が粕酒の給仕をし、女性たちをもてなした。食事が終わって午後3時ごろになると主婦たちが神社に参拝するが、現在と同様、トウヤの主人は参加しなかった。

一方、大座では、神楽座を営むのは春の彼岸入りの翌日と決まっていたが、現在は毎回日取りを決めている。

大座は年長者7人で構成される七人衆が中心になって組織を運営している。この七人衆への加入を控えた男性が、年長者から一名ずつ順番に神楽座のトウヤに当たる。神楽座のトウヤをつとめるということは、七人衆の候補者に入るという意味もあるため、この行事は“神楽入り”とも呼ばれる。

現在、神楽入りを行なうのは、だいたい30歳代の男性で、家族と神社に参拝し、御神酒を奉納している。

しかしかつては、神楽入りの息子とその両親が、大座に属する同姓の家々(“家筋”と呼ばれる)の主婦たちとともに神社に参拝していた。そのころは、神前に御神酒と“枅のめし”を供え、ソノイチに神楽を奉納してもらった。枅のめしというのは、枅の型に葉蘭を敷き、その上に御飯を入れて蓋で押したもので、同じ家筋の主婦たちが協力して作ったという。枅のめしは祭典後に同じ家筋にも配られ、受け取った家では、神楽入りを祝って、家族で分けて食べたそうである。

神社での神事が終わると、神楽入りの男性が、参列した主婦たちを家に招き、鶏肉のすき焼きや神前から下げられた御神酒でもてなした。御神酒の給仕は、神楽入りした男性やその父親がつとめたという。大座の神楽座には、七人衆への加入を前にして、今後大座を運営していく際にお世話になる女性たちをもてなすという意味合いが含まれているのだろう。

祭りの場では、女性に関する様々な禁忌がある一方で、裏方で働く女性たちの姿もよく目にする。裏方で支える女性たちを男性がもてなし慰労する神楽座の行事は、男性だけではなく女性も祭りを支えてきたことを、あらためて気付かせてくれる事例である。

註 京都府教育委員会『京都の田遊び調査報告書』1979年

文学研究科博士課程後期課程在学

巡航船から見た明治後期の大阪

—上大和橋から松島まで—

相 良 真理子

1903年（明治36）3月から7月に開催された第五回内国勸業博覧会の開催にあたって、同年1月に大阪巡航合資会社が設立され、3月から営業が開始された。当初は、西横堀川の新町橋から湊町と、道頓堀川の湊町から日本橋までの運航だったが、同年9月には、東横堀川、西横堀川、土佐堀川、木津川、道頓堀川、西道頓堀川を航行することとなった。1906年（明治39）8月には大阪巡航株式会社が設立され、淀川と大川、堂島川も航路となった。『大阪市統計書』（1909年）によると、同年の大阪巡航株式会社は石油発動機船76隻を所有しており、船長は60人、機関手60人、水夫65人、乗降所員58人、切符売捌人35人だった。乗客は、1年間で607万4788人だった。巡航船は、1907年頃に最も乗客が多かったが、市電が開通されると徐々に乗降場が閉鎖され、1913年（大正2）に廃止された。



『実地踏測大阪市街全図』（1906年）

1909年（明治42）9月には、『大阪時事新報』に巡航船からみた周りの景色が、大阪の裏側として8回にわたって連載された。記者は、東横堀川の南端にある上大和橋乗船場から、道頓堀川、西道頓堀川、木津川を経て松島まで取材している。本稿では、同時期の道頓堀五座の芝居にも触れながら、川沿いの様子が具体的に記された記事をあげてみたいと思う。

1909年9月10日付には、定員を超えるほどの客が詰め込まれて乗っている様子が、次のように記されている。

船は轟々と客を詰める、定員四十何人は疾とくに通り越して居るに、前のお客さん、さう

広う取らずに詰めてお呉んなはれと云ふ、丸で人間を豚扱いにしちよる

次に、道頓堀川について記した記事をみていきたい。

「どんよりと煤煙に曇つた重くるしい」空の下、「汚れ、悪臭のする、危険な、乱雑な」道頓堀川を船は進む。

川沿いの住居は、「表街の地平線下に二層の所帯」、「一見した丈けで、非常に傾斜して居ることが瞭然と判る」家がある。各層には、「種々雑多の洗濯もの」が干されている。続いて次のように記されている。

女の腰のものまでが、高く南風に戦いで覇を大阪の南部に唱へ、遙かに船中の自分共を睥睨するのだから堪らない

殊に裏河岸住居の人は見ゆる限りの人が皆な裸体である、途ある家から半裸美の、肉の少い顔を出した、人の母と見るには余りに年が若い様であつたが、其の女は之れも真裸にした、三つ許りの子を抱いてゐた、而して船から之れを見上げては別は耻はずかしいとは思はない

これらの記事は、道頓堀川沿いの大和町、宗右衛門町、久左衛門町、二つ井戸町、高津町、東櫓町、西櫓町、九郎右衛門町の様子を記したものである。このうち、宗右衛門町と櫓町、九郎右衛門町は、難波新地、阪町とともに南地五花街に属する花街であり、道頓堀川の両岸には、貸座敷や芝居茶屋などが並んでいた。櫓町の芝居側、すなわち道を挟んだ向かいには、道頓堀五座と呼ばれた五つの劇場があった。浪花座、中座、角座、朝日座、弁天座である。浪花座は、1904年（明治37）の失火後再建されておらず、仮小屋を建てて活動写真が上映されていた。

1909年9月の道頓堀では、角座で市川右団治が、朝日座で片岡我童が、中座で中村鴈治郎が、弁天座で新派俳優の深沢恒造が芝居をしていた。なかでも、中座では『大阪朝日新聞』に同年4月3日から12月21日まで連載された渡辺霞

亭の「錢屋五兵衛」が、朝日座では『大阪毎日新聞』に同年1月1日から4月29日まで連載された田口掬汀の「猛火」が上演された。両座ともに大入り満員だったと9月13日付の『大阪朝日新聞』に記され、翌日には、主演の中村鴈治郎と林長三郎の舞台写真が掲載された。



『大阪朝日新聞』1909年9月14日付

さらに、『大阪時事新報』9月6日付には、次のように記されている。

「猛火」は北区の大火を当込んだ際物といつて可い

此炎々として燃上る猛火の光景を仕打の白井君が発明したと聞ては殊に一見の価値がある

「北区の大火」とは、同年7月31日に起こり大きな被害を出した北の大火を指している。上の文中にある「白井君」とは、松竹合名会社の白井松次郎のことである。同年8月27日付『大阪朝日新聞』に、「『猛火』は時節柄煙火を使用せず電気応用を以て煙火よりも一入美事に見せる工夫をなしたる由」と記されていることから、電気を用いて火事の演出を行ったことがわかる。

次に、西道頓堀川と木津川についてみていきたい。

西道頓堀川では、「角材」が「川の兩岸を横領して」いる。この辺りの「川の意義」は、「材木置場と云ふ極く売買染みたもの」である。「両河岸の大方は生活と直接の關係をしてない倉庫だから、仲には随分ひどい名許りの板囲の古ぼけたのもある」「藻屑塵芥水の半ばを掩ふて、而かも半死の蟻が黒い背中を露はした様に、材木の筏を組み浮けてある、狭苦しい、危険極まる、閉塞された旅順口の港口を見た様な所」だ。

また、西道頓堀川と木津川の交わる場所にある岩崎町については次のように記している。

岩崎と日本一の富豪と同じ名の付いた町の

河岸裏の汚いこと、場末の致方ない町とは申せ、之では川の大阪も甚だ面目無い

続いて、「和船で大阪へ這入るものには、劈頭第一に目に触れる場所である」とし、日本政府は鉄道のために「停車場と云ふものに注意して、出来得る丈け見えの善い建物を拵えてゐるが、船著と来たら、皆暮れ見捨て、仕舞つて、少しも相手に成つて、肝煎をして呉れぬ」とも記している。整備されていない川沿いの状況が見てとれる。

西道頓堀川の西端を南北に流れる木津川を北上すると、左手に大阪五花街のひとつである松島が見える。松島の貸座敷「東京樓」の様子が次のように記されている。

浴衣の寝間著が腹を返へして干されてある、夫れと並んで女の尻が二つ見える、二人は何か話してゐる様子、夫れに一人は頻りに鏡を見て居る

又一人の女が加はつた、ふつくりと肥えて、万事を苦に病ぬ面構へだ、嬉れしさうに、尻の女に話しかけると、鏡の女迄が一所になつて大きな声を揚げて、キヤツキヤツと叫ぶ、果ては尻の女も二人共立つた、三人は最う何か口に物を入れて、もぐもぐさせ乍ら、欄干に靠れて、川を見る、船を見る、さうして、何か云つては大きな声で笑ふ

この記事に出てくる三人の女性は、娼妓だと思われる。なお、「東京樓」は、西区仲ノ町一丁目十六番屋敷にあった（名倉唯四郎編『改正浪花の華』1903年）。

これらの記事と、写真や地図、統計データを合わせてみることによって、川に沿って建てられた家並みや繁華街の様子、そこに暮らす人々の暮らしを具体的にみることができるのである。



巡航船（『明治大正大阪市史』第1巻）

大阪都市遺産研究センター RA
文学研究科博士課程後期課程在学

博物館なんでも相談会

石 立 弥生子

関西大学博物館で平成15年に始めた「なんでも相談会」は、平成25年に第10回を迎えた。子供対象の体験型に切り替えた平成18年を基点に、これまでの10年を振り返りたい。

目 的

平成15年に開始した際は、担当教員の指導のもと、地域住民から持ち込まれる史資料や工芸品を拝見し、本館で受け入れている博物館実習生に、資料の取り扱いや鑑定の着眼点、基本的なことでは応対や説明の仕方などを実学させることに重点が置かれた。しかしながら、時価の算出を期待されたり、歴史・美術系以外の予想外の相談が持ち込まれたり、本来意図したものから外れることも多く、所期の目的である資料相談と学芸員を希望する学生スタッフの育成を軸に、平成18年からは、博物館を会場に子どもたちが楽しめる体験型の行事へと転換することになった。



「さわってみよう！博物館」で学生スタッフと一緒に

日 程

小中学生の夏休み中に実施するという方針はあったものの、当初は7月中や8月末に実施するなど試行錯誤を重ねた。現在は、大学の授業の妨げにならないことと、行事を遂行する学生スタッフの参加しやすさに配慮して、春学期試験終了直後の8月初旬の実施に固定化しつつある。また、初期には開催曜日を重視して週末に実施したこともあったが、期待したほど参加者増に結び付かなかった。そこで「安・近・単(価格が安い・近い・簡単に参加)」に気を配り、近年は平日開催に心がけて日程を組んでいる。実際、家族揃って参加されるケースも少なくないが、子どもたち同士、また、小学校3年生以下の児童には保護者の付き添いを求めているため、保護者同士が誘いあって、夏休みの平日に

気軽に参加できるイベントとして定着してきたようである。また、平日開催であれば、学内の食堂等も営業しており、終日キャンパスでゆっくりと過ごしていられる参加者は多い。

実施内容

事前準備や材料が必要なものは事前申込制で参加者を募集する。今年は「木っ端細工」「まが玉づくり」や株式会社紀伊國屋書店による「POP 広告」など7種類334名分の受付をした。概ね募集開始から3日ほどで満席となり、当日の出席率は94%であった。

一方、時間・人数に関わらず楽しんでもらえる自由参加のプログラムも複数設けている。平成21年度から学内外諸団体等の協力のもと、プログラムを徐々に増やしていることもあり、終日博物館で過ごすことができるほど充実してきた。平成25年度は、学外からの5団体を含む8団体・機関等の協力を得て7プログラムを実施した。兵庫県立氷上西高校の生徒さんとともにやってきてくれる丹波市の着ぐるみ「ちーたん」はすっかり本行事のアイドルとなっている。

プログラムに4つ以上参加すると、先着で大学グッズをプレゼントするなど、まんべんなく参加してもらうための工夫もしている。

体験型プログラム

自然史系の教員やスタッフがアブラゼミやバッタの習性を解説しながら、一緒に捕虫網を持って樹木の多いキャンパス内を散策する「キャンパス昆虫探検隊」。折線のついた紙を用意して、自分で折った紙飛行機を広場で一杯飛ばしてもらおう「紙ひこうき大会」。本学鉄道研究会による「鉄道模型コーナー」は、運転操作に長い順番待ちの列ができるほどである。同時に鉄道写真の展示も行い、学生の成果披露に役買っている。

大阪府立弥生文化博物館の出前イベント「狩人きぶん」は、学芸員の着想に学ぶことが多く、行事を運営していく上で大変参考となったが、子どもたちの人気も高いものであった。

学生スタッフとの交流も本行事が地域に定着した要因のひとつと考えられる。本学ボランティアセンターの学生スタッフによる「防災」をテーマとしたコーナー(平成24年度実施)は、普段接することの少ない大学生のお兄さんお姉さんと遊びながら学べ、言葉のキャッチボール



キャンパス昆虫探検隊

が活発にかわされている。考古学研究室の研究活動の一環として生まれた高松塚古墳の四神着ぐるみは、子どもたちに親しみやすい歴史教育を提供している。

また、平成25年度は別日を設けて一日書道教室を実施し、その成果をなんでも相談会当日に展示した。「見るだけ」「聞くだけ」でなく、「体験」することを大切にして、行事を企画している。

参加者

平成18年度、体験型に切り替えた当初の参加者数は363人（2日間）であったが、それでもその多さに驚いたものであった。平成20年に吹田市と吹田市教育委員会の後援をうけて、吹田市全域の小学校へチラシを配布するようになった。

てからも、参加者数は増加の一途をたどる。平成25年度は1日で900人近くの参加者があった。行事内容に改善を加えればさらなる増加も期待されるが、施設のキャパシティや現状の受け入れ態勢を考えると、慎重にならざるをえない。博物館を軸とした行事に留めて博物館教育に特化するか、大学全体に拡大してキッズオープンキャンパスとするか、多方面からの検討が必要な時期にきている。

まとめ

手作りの行事であり、突発的な小さなトラブルはあるが、熱中症対策のために麦茶を用意するなど細かな配慮をして、これまで事故なく安全に実施してきた。

博物館に直接関係のないプログラムも多いが、「博物館に行けばなにか楽しいことがある」と思ってもらえるように、スタッフ一同、春先から準備をはじめ、いかに博物館に興味をもってもらえるかに心をくだしている。さらには、この行事を通じて博物館だけでなく大学全体の雰囲気も感じ取ってもらいたいと欲張りなことを考えている。紙ひこうきを思いっきり飛ばしている子どもが、「あの博物館のある大学へ進学しよう」、そう思ってもらえるための行事でもありたい。今年は第10回を終えた節目であるが、これからの課題も見えてきた。

プログラムと参加者数の変遷

年度	2006 (平成18)	2007 (平成19)	2008 (平成20)	2009 (平成21)	2010 (平成22)	2012 (平成24)	2013※ (平成25)
実施日	8月4日・5日	8月3日・4日	8月1日・2日	8月4日・5日	8月4日・5日	8月6日・7日	7月23日・28日
参加者数 (2日間)	363人	439人	511人	829人	911人	1148人	953人
プログラム内容	自由参加	キャンパス昆虫探検隊					
		さわってみよう・博物館					
		紙ひこうき大会					
	事前申込	史・資料相談会					
		銅鑼スケッチ					
		まが玉づくり	石ころアート	縄文ゴゼット	アコーディオン絵本	まが玉づくり	
			甲冑ファッションショー	紙芝居		一日書道教室	
		葉っぱのバッタ					
		木っ端細工（木工アニマル）					
			木登りてんとうむし	くるくるミツバチ			
		鉄道模型コーナー（関大鉄道研究会）					
				ボランティア体験（関大ボランティアセンター）			
		出前イベント（弥生文化博物館）					
		資料提供（福井県）					
		丹波電がやってきた（丹波市）					
	自由参加						ちーたんを作ろう（丹波市）
	事前申込						
		POP 広告（紀伊國屋書店）					

※2011年（平成23）は耐震工事中のため実施しなかった。

※博物館リニューアル工事のため、7月23日は書道教室、従来型は7月28日（参加者871人）の1日のみと変則で実施。

◆ 博物館だより

◇平成24年度関西大学博物館 開館日数・入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	26	25	26	25	7	17	26	25	19	19	16	23	254
入館者数	2,115	1,933	983	315	2,420	687	812	987	1,760	198	119	493	12,822

◇4月1日から5月19日まで、関西大学大正癸丑蘭亭会百周年記念行事実行委員会（代表 陶徳民 文学部教授）による「大正癸丑蘭亭会百周年記念一近代日本における翰墨の盛典―」を開催し、2,773名にご来場いただきました。

◇博物館企画展として「名刀にかける 刀匠 河内國平作刀展」を6月3日から7月20日まで開催しました。その関連トークショーでは、6月30日に作家・エッセイストの阿川佐和子氏、7月13日に漫画家の日笠優氏が、それぞれ河内國平氏と対談して刀匠の魅力に迫りました。会期中2,597名にご覧いただきました。ご来館頂きました方々に厚くお礼申し上げます。



◇今年で第10回目となる博物館なんでも相談会を7月23日と28日に実施しました。

23日は万葉書作家の鈴木葩光氏指導による一日書道教室「筆とあそぼう」、28日は丹波市、兵庫県立氷上西高校、福井県、大阪府立弥生文化博物館、紀伊國屋書店、本学鉄道研究会の協力を得て、恒例の体験型イベントを実施し、2日間で953名の皆さんに楽しんでいただきました。

◇文化庁の補助金を得て、かんさい・大学ミュージアムネットワークを立ち上げました。今年度は、日常的に接することが難しい楽器や刀剣、個人コレクション資料などについて共同で研修する場を設け、大学ミュージアムや研究機関等に所属する教員や学芸職員、学生等の専門性や能力を高めるとともに、地域の方々へも広く公開し、文化遺産の理解とその継承に向けた事業を行います。北大阪ミュージアム・ネットワークは、11月3日・4日に国立民族学博物館を会場として北大阪ミュージアムメッセを開催します。ぜひご来場ください。

◇本年度上半期に本学校友の河内國平様から鍛刀資料18点、遠山慶一様から印譜1点、河上邦彦様から法隆寺扇子等39点、さらに篤志家の植田兼司様から黄檗宗和気山邦福寺什器仏具おりん1点の寄贈がありました。今後、博物館で充分活用していきたいと考えています。



．．． 編集後記 ．．．

表紙は、古代エジプトの古印（スカラベ、本山コレクションMY-W3036）です。スカラベとは、石・貴石・ガラス・陶土などを素材とし、甲虫の形に作られた護符で、裏面（腹面）に文字や図柄・模様・文章などが彫られているものが多く、しばしば印章としても用いられました。右端のスカラベの裏面にはワニと人物が刻まれ、ワニを化身とする造化の神セベクの守護を願う護符と見られます。

博物館実習展（11月10日～15日）の期間を除き、7月29日から平成26年3月末まで改装工事のため、休館します。第1展示室は大型展示ケースを設置した企画展示室となり、村野藤吾が設計した円形の第2展示室は考古資料の常設展示室となります。平成26年4月、博物館開館20周年と図書館創設100周年を記念した展示会でリニューアルオープンします。

